

<b>Title</b>	心病む人の死生に関する家族の対応の仕方(臨床死生学研究)
<b>Author(s)</b>	越智, 裕子
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-1
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2227">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2227</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

**【臨床死生学研究】**  
**心病む人の死生に関する家族の対応の仕方**

2010年2月27日（土）、新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室にて第6回死生学研究会が開催され、聖学院大学大学院教授、平山正実氏から発表があった。本講師は、遺された人の持つ4つの問題点（①孤独感、②不条理感、③罪責感、④怒り、④命日反応）を順次に説明している。

①孤独感：自死者、未遂者ともに孤独である。人間は色々な形で関係性の中で生きているが、それが切れ、脅かされると危機状態に陥る。つまり、孤独感が一番恐ろしいということである。その解決として、現在我が国では、多額の国家資金を投入し自殺対策に講じているが、それでも人間の孤独を癒すには限界がある。それよりも、マンツーマンのかかわりが重要である。特に自死者、未遂者共に何らかの形でメッセージを発信しているため、周囲にいる者が、同じ目線に立ち、真摯に受けとめ、孤独を見抜く傾聴で、安全感と、安心感を与えることが大切である。その反対で、まだ大丈夫、自分の力でできるだろうといったかかわりは時期を逃し、自死に追いやる可能性がある。他にも、治療に促すだけでなく、彼らの身柄を保護するようなネットワーク作りが重要である。

②不条理感：逆縁といわれる者が非業の死を迎えた人ほど不条理感がある。なぜ亡くなったのかといった問題解決型の解決法では解決できない。死とか愛とかは神秘に属するもので、分からないこともある。それよりも、人間の限界に気づき、自分が死とどう向き合うのか、すなわち問う姿勢から、問われる姿勢に逆転換することが重要で、支援者は転換点で支援することが必要である。

③罪責感と怒り：病にせよ、死別にせよ。これらは完全に解決することはない。一生涯心の痛みとして抱え込んで行かなくてはならない。悔いの気持ちを自己処罰に求めると罪責感となり、他者処罰的に求めると怒りの感情が中核をなす。また、罪責感の処理の仕方を間違えると、希死念慮が生じ後追い自殺が起きる。それを乗り越えるため、自己の限界を知り宗教に入信する者も少なく

ない。また、攻撃性を他者に転換し、心理的な均衡を保とうとすると人間関係がこじれ、そこに第三者の介入がないと関係性が機能不全になる。そのため、どこかで客観的な観察者が自分の観念の中に必要で、それがないと負のスパイラルになる。また、罪責感の背後には万能感もあるということだ。

④命日反応：人間の記憶は、ネガティブな体験である親しい人の死や傷つき体験を心の中に焼き付ける傾向にある。ゆえに、命日近くになるとトラウマになり心と体に投影される場合がある。虚無感や悲哀感や絶望感、罪責感、怒り、動悸、息切れ、しびれ、不眠などが表出する。そのため、モニメンタルな日が来るときにはケア体制に入る必要もある。

以上が本講師によるメンタルヘルスを考える場合に大切なこととして発表された内容となる。

（文責：越智裕子 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2010年3月9日、新都心ビジネス交流プラザ4階聖学院教室）